

探求・川にちなんだ万葉の歌

万葉の川心 第5回

研究第二部 船田 園子

漁する海人の児どもと人はいへど

見るに知らぬ良人の子と

(巻第五 松浦川(玉島川)に遊ぶ序より 八五三番歌)

答ふる詩に曰く

玉島のこの川上に家はあれど

君を恥しみ顔さずありき

(巻第五 八五四番歌)

目を閉じて、川を遙かに上っていく。
激流がほとばしる。
山奥へと迷いこむ。
生い茂る樹木が悪魔の使いのように蠢く。
光が臉をよぎるたび
現実はずの遠き
ただ何かにひかれるように
これ以上行つてはいけなさと昔から言い伝えられていた秘境へと
ひとり入っていく。
忽然と視界が開けた。目の前には幾人もの美しい女たちが
水と戯れている。
そうか。
現れ出たここは、やさしい光があふれる別天地であったのだ。

唐代の小説に『遊仙窟』というのがある。黄河の河原に至る途中、路に迷つて仙境に入り、女仙の歓待を受けた艶事を叙したもので、万葉集にも影響を与えている。この歌の作者と考えられる大伴旅人は現在の佐賀県東松浦郡の玉島川を訪れたとき、この二首を詠んだ。やはり『遊仙窟』を参考に旅人の想像がふくらみ、歌の中で玉島川にも遊仙窟が生まれたと思われ、その序文には次のような話が載せられている。

思いがけず魚を釣る娘たちに逢つた。その花のような美しさは比類なく、光輝く姿は際立っている。眉は柳の葉の開いたごとく。頬は桃の花の開化のごとく。気高さは雲を凌ぐほどで、雅やかなことはこの世のものとは思われない。私は尋ねた。「もしかしたらあなたには仙女ではありませんか?」すると娘はほほえんで言った。「いいえ、私は漁夫の子ども。名乗れるようなものではありません。ただ生まれつき水に親しみ、山を楽しんでいただけです。」

『論語』雍也編に「知者ハ水ヲ樂シビ、仁者ハ山ヲ樂シブ」とあり、娘の言葉に、実は神仙の高貴な女性であることが匂わされている。

松浦川(玉島川)を詠んだ一連の歌(十一首)は、すべてが旅人の歌と
いうのではなく、作者についてはいくつかの論がある。しかし、この初め
の二首が次々と皆の想像を掻き立て、それを旅人は別の境地で楽しんで
たのではないだろうか。

ゆつたりと流れる川を眺めて
いると、河原を吹く風のように
思いは自由に旅をする。この川
の流れの源へ、川が流れ着く海
へ。遠い昔の自分や、未来の夢
の辿り着く先。

気が付くと、川の色が輝きを
変えている。日が西の空に暮れ
かかっている。夕暮れ時のこと
を逢魔が時というのをふと思ひ
出した。「悪魔に出会う前に……」
現実の夕日のなかに戻ろう。長
い影を川辺に残して。

